

建築ジャーナル

第960号2000年2月1日発行(月1回・1日発行)
1964年7月13日第3郵便物認可 ISSN 1343-3849

ARCHITECTURAL JOURNAL

FEB. 2000

2

No.960

特集 愛知万博検証

大型イベントに 魅せられる人たち

何をやってはいけないか、意識してほしい／大谷幸夫

建築とは必要に応じてつくるもの／鬼頭 梓

大阪万博を振り返って／林 昌二、芦原義信、阪田誠造、進来 廉、倉田直道ほか

TOP INTERVIEW 船瀬俊介(『買ってはいけない』著者)

住宅は最大の欠陥商品である

建築時評

建築家は言葉ではなく行動で市民利益を守る先頭に立て!

東日本版

「都市社会学」という視点の可能性

リアリティへの敏感さを手に入れろ!

リアリティへの敏感さを手に入れろ！

「都市社会学」という視点の可能性——後藤範章氏に聞く

とらえがたい「東京」を社会学ではどう読み取るのか。「写真で語る：『東京』の社会学」という、1枚の写真から「東京」や「東京人」を社会的に考察するという実習を行なっている後藤範章氏（日本大学文理学部社会学科教授）に話を聞いた。「リアリティへの感応力」によって、現象の背後にある社会のプロセスや構造が浮かびあがってくるという。その感性は閉塞感をもつ建築都市において、ひとつの突破口となり得ないだろうか。

「ここにこんな建築をつくるのはなぜだろう」と思うことがある。都市計画においても、はたして本当に現在、未来の人間の生活・文化に対する感性を研ぎ澄ませているのか、と。あるいはきちんと計画され、つくられたものであってもそれをデザインした者の意志とはまったく違う使われ方をすることがある。こういった現象を社会的に見るというのは、どういうことなのか。

「写真で語る：『東京』の社会学」では、学生たちは「東京」「東京人」に対する感性を研ぎ澄まし、洞察力や構想力、表現力を質的に高めていく。「それはまた、リアリティを嗅ぎ取り、読み込み、共通の言葉を紡

いでいくことによって、それまでとらえきれていなかった諸事象の背後に見え隠れしている社会プロセスが可視化されていく、という過程でもある」（『マルチメソッドとダイレクトオブザベーション』後藤範章）。

都市は複合的・総合的にとらえなければ見えてこない。建築にとっても重要な「リアリティへの感応力」を研ぎ澄ませ敏感さを養っていく上で、都市社会学はひとつの視点を提供し得るのではないだろうか。その観点にもとづき後藤氏に話を聞いた。

写真から逆描写する「東京」

「東京」がどれくらいの広がりをもった都市空間として考えられるかということのひとつとっても、東京をとらえるのはむずかしい。都市的な現象が拡散していて、しかも東京都とか23区といった行政的な区割りがあり意味を持ちません。たとえば神奈川・千葉・埼玉から毎日300万もの人が通勤通学で23区に来るわけです。ですから多くの人たちの生活圏は、もう東京23区をはるかに越えるくらい超広域化しています。

東京はどこ、東京とは何、ということを取りあえず棚上げして、学生

たちがはぎ取ってくる写真の1枚1枚から、「東京」とか「東京らしさ」というものを逆描写する。そういう道筋でこのプロジェクトをある期間積み重ねれば、逆に東京や東京人がモンタージュされていくんじゃないか。6年間実習を積み重ねてきた上でとらえ直せば、教育実習用プログラムを離れて、ひとつの調査手法として東京の研究をすることも可能なのかなと思います。

東京をとらえるキーワード

過去の世界をいくつかのシリーズに分けて紹介できます。

1. さまざまな人間模様、東京人グラフィティ——舞台としての東京
2. 人を動かす社会的装置——仕掛けとしての新規さ・おしゃれ・視線の動き・はやり・欲望
3. コミュニケーションの間接性と断片性——サイバースペース東京
4. 移動性と流動性と超域性——東京の超広域化
5. グローバリゼーションと人種的異質性——世界都市「東京」

こういう文脈で過去の世界をシリーズ化して経年的変化を見たり、ある種の特徴点を見いだすのは可能です。

2・3がとりわけ東京らしい。2は新規さとか欲望を積極的に「仕掛ける」ことによって、人が動かされていく。そうした新規さやおしゃれやはやりごとがひとつの社会的な装置となって、空間の中で仕掛けられ



後藤範章（ごとう・のりあき）／日本大学文理学部助教授。1956年長野県飯田市生まれ、日本大学大学院博士課程修了。専門分野 都市社会学・地域社会学・社会調査論。主著、『社会調査へのアプローチ』（共編著、ミネルヴァ書房、1999）、『都市化の現状と将来』（共著、大明堂、1995）、『Tradition and Change in the Asian Family』（共著、East-West Center、1994）ほか。

ています。(下記資料参照)

最初仕掛けるのは、業界人や企業と、商業ベースです。その仕掛けに乗って、自分の感性で受け止めた若者が二次的に違うかたちを作り出すとする。実質的な東京における人口の5%が反応するだけでも市場として成り立つわけですから、それだけ商業資本が空間をコントロールする度合いが高まっているといえます。

3はコミュニケーションが直接的ではなく、ゲームとかケイタイ、インターネットが一般化すると同時に、人間の関係性が断片になっていくこと。そうした関係やかかわりの断片化が、とくに東京におけるコミュニケーションを考えた上で、ひとつの特徴となって現われてきている。「断片化する」とはデジタルで、数量的な把握ができたり、操作の対象になるということ。そういう特徴が読み取れるんじゃないでしょうか。

座標軸が見えない

ホームページの書き込みには建築や都市工学系の人からが多い。たとえば、顧客のニーズがどういうところにあるかだとか、あるいは人が生活する単位としてのまちをどう設計す

るのか、そういう面で建築家や都市工学の研究者たちもある種揺れていて、自分の仕事をどの辺に位置付けていいのかという、座標軸が見えにくくなっているのではないのでしょうか。

今まで工学系、建築系の人と社会学系の人とは、コミュニティの設計とかまちづくりを語っても、全然議論できなかったんです。対象となるフィールドが違っていたり、視点や方法が違うということもあるけれども、それはお互いが自分の守備領域だけで固まっていたため、それをはいでやれば仕事ができた。社会学は社会学で視点も方法も議論も揺らいでいますし、建築、工学系もそうなのではないでしょうか。今までと違うフィールドと接点を持ち、交流をはからないと、まちをつくったり、人が住む家をつくったりということが、だんだん今までと同じようにはできなくなっているという気がします。

市民のニーズをどうやって建築に取り入れるのか。今あるニーズに合わせるのではなくて、新しいニーズを掘り起こしていく、積極的な仕掛けが必要でしょうね。社会を読むときも同じです。社会学では、今までマササーヴェイのしかたが一般的で、

調査票を配って、世論の動向を数量的にとらえて、マジョリティに合わせて社会を説明するというのが案外多かった。もう少し違った視点からアプローチしないと社会をとらえられないし、先も展望できないという感じが強まっているのは事実です。マクロだけでなくミクロもともに見るが必要になってきています。

社会現象としての建築

社会学の立場でいうと、ひとつの建築物に社会の先端的な現象が表象されるということがしばしばあります。そこから、社会の変化の兆しを見いだすこともできるので、建築家が新奇なものを追うのとは別に、社会の先端部分の変化を身感じて建築として表現するという仕事をもっともってやってもらえれば、われわれの目からすればすごくおもしろい。建築的な発想を離れて、社会現象とか社会変動の兆しを建築に折り込むということになれば、それこそ「写真で語る」と同じように建築で語る社会学も成り立ってくる。そういう意味では、建築そのものにわたしたちは注目していかなくてはいけないのかもしれません。(取材・文 青井)□

「写真で語る：『東京』の社会学」

「東京」や「東京人」を象徴的に表すと考える場面を1枚の写真におさめ、適切なタイトルとともに社会的な言説で短い解説を加えて作品化する

Please wait to open the door. -工事現場も原宿中！-

原宿駅から表参道を200~300mほど行った明治通りとの交差点。そのまままっすぐ500~600mも歩くと、南青山に達するというロケーション。1999年11月3日オープン予定のビルの建設工事が進められている。その中にはGAP、ソニープラザなど計5店舗が入る予定である。それにしても奇妙ではないか。すぐ後は工事現場だということに、若者が何人もたむろしている。白い壁に赤字の横文字、少しでも開いたドアが人を招くのか。この外壁は専門のサインデザイナーの手によるもので、日本サインデザイン協会の賞を受賞している。工事現場であることをまったく感じさせないばかりか、外壁のアートが街の景観に溶け込んでいる。いや、むしろ街の雰囲気構成する一部となっている。流行最先端のお洒落な街では、工事現場の外壁にも「原宿らしさ」が巧みに演出されている。



1999年6月30日17時 渋谷区神宮前にて撮影

●過去の作品をホームページで見ることができます <http://www.chs.nihon-u.ac.jp/sdc/sgpt/neejob/tokyo.html>

「東京人」観察学会(日本大学文理学部)